

津本陽

松風の 人

吉田松陰とその門下



松風の人

津本

陽館

章
Tsumoto Yo

吉田松陰とその門下

江和学院

蔵

松風の人 吉田松陰とその門下

二〇〇八年一月七日 初版発行

著 者 津本 陽

発行者 西原賢太郎

発行所 株式会社 潮出版社

〒一〇二-八二一〇 東京都千代田区飯田橋三-一-三

電話〇三-三三三-〇〇七八(編集)

〇三-三三三-〇〇七四(営業)

振替口座〇〇-一五〇-五-六一〇九〇

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Yo Tsumoto 2008, Printed in Japan

ISBN 978-4-267-01793-3 C0093

<http://www.usio.co.jp>

落丁・乱丁本は小社営業部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社に許諾を求めてください。

松風の人

吉田松陰とその門下

目次

樹々亭

兵学師範

脱藩

東北遊歴

遊学の旅

海外脱出ならず

下田踏海

雄図挫折す

入獄

野山獄

火を点じる者

7

24

41

58

75

92

109

126

144

162

180

杉家の日々

国士養成

皇天后土

獅子の心

獅子の道

死ぬべきとき

涙松

評定所

露の命

志士の魂

参考文献

369 351 334 316 299 282 265 248 231 214 197

装丁 多田和博

装画 絹本着色 吉田松陰像

(山口県文書館所蔵)

世界六大洲

(京都府立総合資料館所蔵)

松風の人

吉田松陰とその門下

樹々亭

吉田松陰の生家跡は、萩市の東寄りにある毛利家菩提寺、東光寺のある小山の南側、団子岩と呼ばれる丘の片隅にある。

いまでも礎石が残っており、本宅、離れ、井戸などの配置がわかる。

松陰が生れたのは天保元年（一八三〇）八月四日である。萩藩士杉百合之助の次男、幼名は虎之助であった。母は藩主一門の阿川領主志摩熙徳の家来村田右中の三女瀧である。

杉家は二十六石であるが、松陰の曾祖父の代に官金を借用したため、実収は二十三石であった。祖父七兵衛は貧しかったが薄粥をすすり空腹に堪えながら、朗々と詩を吟じ、明るく篤実な性格で、親戚知己の面倒をよく見た。

百合之助が六、七歳になった頃からは、藩の役に就き、ほとんど家にいるときがなく、家事はすべて妻の岸田氏にゆだねた。このため百合之助は母を扶け、家事にあたり遊ぶ余暇もなかった。

文化十年（一八一三）三月、萩城下の大火に際し、屋敷は家財とともに焼燼し、その後十

余年間は親戚などの縁を頼り、転々と諸所に寄寓し、困窮のきわみに達した。そのような生活難のうちにも弟妹の教育、自分の勉学をおろそかにしなかった。

杉氏は好学の家で、二人の弟、大助と文之進ぶんのしんを励まし、読書に親しませた。米をつくときも、田畑ではたらくときも、かならず身邊に書物を置いていた。

文政七年（一八二四）百合之助が二十一歳のとき、父七兵衛が病歿びようぼつした。翌年ようやく萩城の東一里ほどの東光寺山団子岩に住居を建てた。新築したものではなく、古家を買ひ、移築したものであった。家はもとの名の樹々亭じゅじゅていをそのままに呼ぶことにした。岸田氏はいった、「こんなうれしいことはありません。ようやく一家の者ばかりで暮らせるのですから」

樹々亭の名の通り、山の中腹で南面した庭先からは松本川のむこうにひろがる、城下の町並みをひと眼に見晴らすことができる。

城下町の向うには、指月山しづきやまを背にした萩城の天守閣が麓ふもとを光らせている。遠く六島ろくとうをのぞむ、城内の西の浜の辺りは風光がおだやかで、藤の花房の垂れる季節は、極楽にいるのかと思えるほど、ころよくさわやかな風が吹き通う。

杉家は林に囲まれた百坪ほどの敷地にある。庭からの眺めは絶景といえようが、家は三畳の玄関に六畳二間。このうちに床の間、押入が含まれる。ほかに三畳二間、狭い台所。別棟は廩うまやと納屋を兼ねている。

瀧が百合之助の妻となったのは、樹々亭に杉家一族がようやく住みなれた翌文政九年（一

八二六)であつた。

松陰が生れた天保元年、祖母岸田氏は五十三歳くらいの年齢であつた。父は二十七歳、母は二十四歳、兄梅太郎は三歳、叔父である二十四歳の吉田大助と二十一歳の玉本文之進は、それぞれ他家の養子となつていたが同居しており、叔母乙女は十七歳であつた。

狭い陋屋ろうおくに八人が暮らしており、松陰の生れたのち二年目に妹千代、六年目に寿ひさ、ついで艶、文、敏三郎と四妹一弟が生れた。叔父二人はその間に独立して一家を構えたが、松陰が三、四歳の頃、祖母の妹が舅しゅうとと一児を連れ、樹々亭を頼つてきた。

夫に先立たれた彼女は、貧窮の暮らしをささえるうち、病を得て病床に臥ふすようになったので、家族とともに杉家で養われるようになった。

樹々亭に十三人が暮らすようになれば、当然、一室に何人かが同居することになる。瀧は貧困のうちに大家族を養わねばならないため、夜明け前から深夜まで休む間もなくはたらいだが、病人の汚物を洗うことを厭いとわず、親切に看護した。

岸田氏は嫁に泣いて感謝した。

「そなたの日頃の苦勞を知りつつ、そのうえに三人も養う重荷を負わせた私は、鬼のような婆ばばじゃと自分を責めていたが、あわれな妹らのために、嫌な顔ひとつせず、なんとよく尽くしてくれることか。心からお礼を申しますえ」

瀧は笑顔で応じた。

「なにをおっしゃいます。私は体だけは丈夫ゆえ、はたらくことを厭いはいたしませぬ。どうぞお氣遣い遊ばしますな」

瀧は、このほかにも親戚の病人を引きとり看護してやった。

彼女は夫とともに近所の畑を耕し、山へ柴を刈りにゆく。田圃を耕すため、女手では無理とされていた馬を使うようになった。

松陰は兄の梅太郎とともに、父にとりもなわれ、山仕事に出かけ、畑も耕す。父百合之助は畑の畦に本を置き、はたらきつつ二人の息子に声をかける。

「さあ、始めるぞ。よく聞いて暗誦いたせ」

百合之助は歛をつかいながら、『大学』『論語』『孟子』の文章を、一句ずつ声高く朗誦した。梅太郎が父の言葉をなぞって大声でくりかえし、松陰も意味もわからない言葉を、まわらない舌で暗誦した。

二人の声が低くなると、百合之助は励ました。

「もっと大きな声で唱えよ。お前たちは男じゃきに、いかなるときでも元気でおらにやあいかんのじゃ」

百合之助は文政十年（一八二七）二月に仁孝天皇が徳川將軍に下された詔勅、阿波出身の神官玉田永教の書いた『神国由来』を、しばしば朗読して聞かせたので、松陰たちもいつのまにか覚えてしまった。

松陰は二歳年下の千代をかわいがり、裏山へ椎の実を拾いにゆき、松茸、椎茸などを採りにゆくときも手をひいて妹をかならず伴った。

千代は大正十三年（一九二四）九十三歳まで長命したが、兄にかわいがられた記憶を常になつかしんでいた。

松陰たちが幼時、意味もわからないままに暗誦した仁孝天皇の詔勅とは、天皇が十一代將軍家齊の功を思召され、太政大臣に任ぜられ、世子家慶を従一位に叙し、優渥なる勅語を賜ったが、その全文である。

当時、朝野に徳川氏の榮譽を祝う声が満ちたが、家齊父子は坐してこれを受け、家臣を上京させ御礼を言上させたにとどまった。

百合之助は当時二十四歳であつたが、このことを伝え聞くと、沐浴して衣服をあらため、はるかに皇居の方を拝し、泣いて皇室の式微を嘆き、嘆息していった。

「徳川將軍家の無礼なること、ついにここに至れるか。われらは坐視するに忍びず。いつかは皇朝のために力を尽くさねばならぬ」

彼はこの詔勅をのちに松陰兄弟のために謹写して暗誦させ、大義名分を重んずべきことを教えた。

また当時京都賀茂神社の神官玉田永教が、一時安芸厳島神社に滞在し、神道講演をして巡遊したことがあつた。百合之助は玉田の著した『神国由来』という冊子を熟読し、それを

松陰兄弟に暗誦させたのである。

人の可塑性は七歳頃までに定まるといわれるが、その期間に松陰は父の尊皇精神を魂のなかにうけついたのである。

松陰は田畑の耕作をするあいだに、百合之助から四書五經、歴史書の素読など基礎的教養を口授された。杉一家の労働の場ではかならず朗誦の声がおこり、頼山陽、菅茶山らの詩を長吟する声が附近にひびきわたった。

松陰の叔父玉本文之進は、きわめて峻厳な性格で、容易に人を褒めなかつたが、瀧の性格を激賞していった。

「お瀧殿のふるまいは、常に男子の及ぶあたわざるところじゃ」

松陰はのちに妹千代にあてた書簡のうちに、杉家の家法として記している。

「第一には先祖を尊び給い、第二に神明を崇め給い、第三に親族をむつまじくし給い、第四に文学を好み給い、第五に仏法に惑い給わず、第六に田畠の事を親らし給うの類」

松陰はそれを「世に及びがたき美事」といい、「昔山宅にて父様母様の昼夜御苦労なされたことを、忘れまじく」と妹に諭した。

松陰は幼児として遊ぶことも少なく、父母の教導に従い、心身を發育させていった。

尊皇精神は、日本を封建時代から現代へ導いた原動力になったものであるといわれるが、百合之助の教導によって、松陰の身内に独特の批判精神を生ぜしめることとなった。

天保十四年（一八四三）、百合之助は百人 中間頭兼盜賊 改方に任ぜられ、長女千代を伴い城内の役宅に住むこととなった。

瀧は留守宅を守り、家事農耕のことは自分が主となっておこなわざるをえなくなった。

この間にも、子女の教育には特に心をくばり、子供たちに家事を手伝わせ学業をおろそかにさせることはなかった。

百合之助と瀧のほかに、松陰の教育に力を貸したのは、叔父の玉木文之進であった。文之進は玉木氏第六代の養子となったが、天保九年（一八三八）までは杉家に同居していた。杉家と玉木家は以前から姻戚関係にあった。剛毅峻厳な性格で、保守的な思想の持主であったが、きわめて廉潔で節義を重んじ、その印鑑には、つぎのように刻んでいた。

「百術不如一清」
ひやくじゆつはいつせいにしらず

玉木家はすでに杉家と二度縁組をした姻戚であった。

松陰は天保五年（一八三四）、父の弟大助が七代目を継いでいた吉田家の仮養子となり、翌六年六月、大助病没のあと吉田姓を名乗るようになり、通称を大次郎とあらためた。

吉田家は一条天皇の御代に朝勤した藤原行成から出て、のちに織田信長に仕えた松野平介が出た。吉田家の始祖友之進重矩は、平介の曾孫で、元禄十三年（一七〇〇）和漢の兵法学者として毛利吉広に仕えた。平介はのちに山鹿素行の後嗣高基に師事し、極秘三重伝を許された。

彼の子孫は代々山鹿流兵学により毛利氏に仕えることとなった。家禄は五十七石六斗で、松陰は養父と同様に大番組に属した。彼は杉家と二度婚姻を重ねた吉田家の八代当主となった。

吉田家は多田、大西両家とならび、それぞれ藩校明倫館で家伝の兵学を講じなければならない。吉田家では、松陰が六歳であるので、教授は先代、先々代の高弟に代理させることになった。

松陰はこのとき家学を研究し、兵学師範となるべき運命を与えられた。彼は叔父の玉木文之進によって教導をうけた。

長州藩では徂徠^{そらい}学派の学者を用い、藩士の多くがその素養をひく学問をしていたが、文之進はそれをかえりみず朱子学派の経説を研究し、大義名分を重んじるとともに、学問をなすにとどまらず実践^{きやうこう}躬行を重んじた。松陰がのちにあらわす革命家としての資質は、文之進によって磨かれたものであった。

文之進の教えかたは、きわめて厳格であった。本の読みかたや、勉学の姿勢についてもわずかでも崩すことを許さなかった。

このような教授方針は、旧日本陸軍幼年学校でもおこなわれていた。『グラフィックカラ―昭和史 第五卷 帝国軍隊』（研秀出版）に、大阪幼年学校の自習室で本を読む生徒の写真が掲載され、説明がつぎのように記されている。